

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：32618

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K13063

研究課題名(和文)新出資料紅梅文庫旧蔵本を中心とした三条西家源氏物語本文の再構築に関する研究

研究課題名(英文)A study of the text of Genji Monogatari by SanjoNishi family using the newly discovered Koubai Bunko manuscript

研究代表者

上野 英子(UENO, EIKO)

実践女子大学・文学部・教授

研究者番号：60205573

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文):新出資料の紅梅文庫旧蔵本源氏物語(以下、紅梅本と略)は、三条西実隆の最初の手沢本(以下「文明本」と略)を祖本とし、伏見宮家本を親本とする。この紅梅本に拠って、三條西家が藤原定家の「六半本」を青表紙正本と捉えていた可能性のあることが判ってきた。では紅梅本はその後の三條西家本にどのような影響を及ぼしたのか、特に実隆最後の手沢本となった日本大学本との関係はどうなのか。また「四半本」を代表する大島本を初めとする、室町時代の代表的な写本と比較して、紅梅本の本文にはどのような特徴があるのか、更に紅梅本を生み出した伏見宮家について分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本調査によって、伏見宮家本から、紅梅本以外に熊本大学本も書写されていたこと。紅梅本と熊本大学本に共通する書入は実隆「文明本」由来のものである可能性が高いことが判明。結果、両本から推察される実隆「文明本」の本文は、現存する定家「六半本」により一層近接した。またこれまで実隆初期の源氏本文とみられていた書陵部蔵三条西家証本は、実隆協力本と位置づけるべきであり、さらに紅梅本は、巻単位ではあるが、日本大学本を初め、室町期の諸写本に影響を及ぼしていたことも判明した。三條西家の本文を明確に位置づけていくことは、定家「四半本」にのみ傾倒した現在の本文研究に新たな視野を導入することになるだろう。

研究成果の概要(英文):The Tale of Genji in the old collection of Koubai Bunko (hereinafter abbreviated as Kobai-bon), which is newly manuscript, is based on Sanjonishi Sanetaka's first Genji-Text (hereinafter abbreviated as "Bunmei-bon"), and the Fushiminomiya family version as the parent. Based on this Koubai version, it has become clear that the Sanjonishi family may have considered Fujiwara no Teika's <Rokuhan-bon> to be the Aobyoshi original version. Then, what kind of influence did the Kobai version have on the later Sanjonishike version, and in particular, how is it related to the Nihon University version, which was Sanetaka's last Genji-Text version? In addition, what are the characteristics of the Kobai-bon manuscript compared to the representative manuscripts of the Muromachi period, such as the Oshima-bon, which is representative of the "Yotuhan-bon"? analyzed.

研究分野：源氏物語享受史研究

キーワード：源氏物語本文研究 三條西家源氏学 紅梅文庫本源氏物語 明融本源氏物語 青表紙本 書誌学 三条西実隆 源氏物語注釈書

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

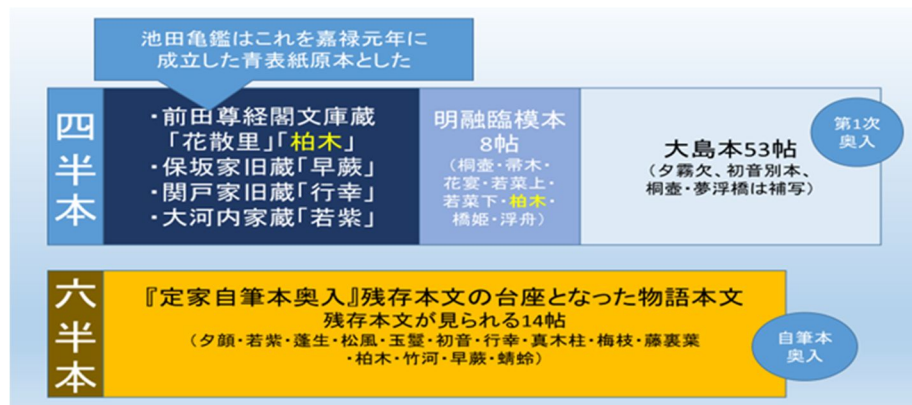
1. 研究開始当初の背景

報告者はこれまで、伝明融等筆源氏物語や覚勝院抄源氏物語、耕雲本源氏物語等を用いて、室町時代における源氏物語享受(本文と注釈)の研究を行ってきたが、偶然入手できた紅梅文庫旧蔵本源氏物語(以下、紅梅本と略)の調査から、当該本が、室町後期の源氏学を牽引した三條西実隆が用いていたテキストの写しであることが判明。更に調査を進めていくと、祖本は、実隆が全冊自ら書写し、その後20数年にわたって愛用し続けたところの、実隆最初の手沢本(散逸。以下「文明本」と仮称する)であったこと、しかもその本文は定家の「四半本」ではなく「六半本」に最も接近していること等が判明した。

応仁の乱後に誕生し、戦国時代を駆け抜けた三條西家の源氏学は、注釈史のなかで大きな足跡を残したが、それ以上に彼らの源氏物語本文は、『湖月抄』に流れ込むなど近世にいたるまで甚大な影響を及ぼしてきた。「混成本文の時代」(池田亀鑑)と評された当時、四辻善成や一条兼良といった前代の英才たちすら手をこまねき、「源氏の証本一様ならず、人の好むところに従ふべし」(『花鳥余情』)とせざるを得なかった本文状況のなかにあつて、三條西家の人々は当流は青表紙本でよむと宣言、人に請われれば自分たちの本文を開示していったからである。一度は「青表紙本と申す正本、今は世に絶えたるか」(『師説自見抄』)とまで評されていた青表紙本が再び脚光を浴びることができた背景には、彼らの功績が大きかったといえるだろう。

だが近現代に入ると、それまで実隆初期の源氏テキストとされていた宮内庁書陵部蔵三條西家証本源氏物語(以下、書陵部本と略)が、実際には河内本や別本も混入した混成本文であったこと、また実隆最後の手沢本である日本大学図書館蔵三條西家証本(以下、日大本と略)は、確かに青表紙本系ではあったものの、明融本や大島本に代表されるような青表紙本とは些か本文が違って、河内本系本文と軌を一にする傾向がままたま見られること等が明らかになってきた。その結果、混成本文である書陵部本の奥書に「青表紙正本」と揮毫した実隆の見識、ひいては三條西家の本文そのものに対する信頼度も大きく揺らいでいったのであった。

とはいえ、現存する定家の源氏写本は1種類だけではない。かつて池田亀鑑氏は、その書型から「四半本」とされているものを青表紙本とした。だがもう一つの定家本、すなわち『定家自筆本奥入』の残存本文であるところの「六半本」もまた、定家の書入れが残る定家手沢本であり、紅梅本はこの「六半本」の残存本文に近似していたのである(詳細は下図参照のこと)。



『実隆公記』には宗祇持参の青表紙正本帛木巻を披見したという記事がある(文明19年3月30日条)。実隆が披見したのは、明融本や大島本といった、今日「四半本」とされている定家本ではなく、「六半本」だったのではないかと。河内本との接触があるというのも、もともと定家の「六半本」自体がそういう本文、すなわち第1次河内本の本文を定家が参照し、これはと思う本文を手沢本中に書き入れていたのではないかと、という疑問が生じた。

「四半本」「六半本」共に、実隆の時代まで揃い本で伝わっていた可能性は少ないように思うのだが、仮に端本であったにせよ、実隆が披見できた定家本は「六半本」の方であつて、彼はそれを青表紙正本と信じ、本文に採り入れたのではないかと仮説を立てた。

2. 研究の目的

上記のような作業仮説のもと、まずは紅梅本について更なる分析を試みて報告書を作成すること、その報告書を紅梅本の全画像とともに、より利用しやすい形でインターネット公開することを、今回の研究の目的とした。報告書の作成に際しては、(A)紅梅本自体に焦点をあてた部分と、(B)室町時代の源氏物語本文史の上での紅梅本の位相を分析する部分と、両面からの分析を目指した。かかる報告書を参照することで、画像を利用する人が報告書の提言を批判的に検証してくれることを期待したからである。

3. 研究の方法

前項研究の目的のなかの(A)では、紅梅本の書誌、紅梅本の成立背景(紅梅本は文明本を書写した伏見宮家本を底本としているため、伏見宮家における源氏享受史を明らかにする)実隆手沢本の流れ(紅梅本から日大本へという流れの分析)を明らかにした。

そして(B)では、紅梅本の本文がどこからやってきて、実隆手沢本の中でどのように変容し、さらに室町時代の諸本とクロスしながら、江戸時代へと流れ込んでいったのかを具体的な事例を通して明らかにすべく、紅梅本を含む室町時代の主立った写本との分析を行った。この課題は極めて大きな問題であるため、室町時代の源氏本文に関心を有する仲間を募っての共同研究となった。メンバーは書誌学・文献学・統計学・享受史研究等、異なる方法論と切り口をもって、紅梅本を含む諸本の調査を行い、定期的な研究会を通じて相互に発表と議論を重ねたのち、各自が報告書をまとめることにした。このような試みによって紅梅本本文の位相は自ずと逆照射され、報告者の作業仮説の妥当性も検証されていくだろうし、また各自が試みた切り口と調査方法は、今後の室町時代本文研究上の事例研究として、参照されていくだろうと思われた。

なお、紅梅本影印のインターネット公開に際しては、利用の便を考慮し、画像毎に『源氏物語大成』の頁数との紐付けを行うことにした。

4. 研究成果

本欄ではインターネットで公開した報告書の中より、主に紅梅本に直接関連のあった事項を採り上げて箇条書きしていくが、下記の成果は研究仲間の功績が大であったことを申し添えておく。

(1)『実隆公記』によれば、伏見宮家の上臈局に文明本の書写を許した実隆は、2度目の手沢本永正本を所有していた時期から、更には永正本売却後3度目の手沢本となった大永本作成時にも、全冊か否かは不明だが、何回かに分けて伏見宮家の南御方より源氏の写本を借用したとあるのだが、今回の共同研究によって、この上臈局と南御方が同一人物だったことが判明した。つまり実隆は、一度は手放してしまった文明本の本文を伏見宮家の本を通じて再現しようとしていたわけである。

(2)統計学からの判定によれば、紅梅本を最後の手沢本となった日大本と比較すると、本文の似ている巻も多く、就中桐壺・帚木・空蝉・夕顔の四帖は親本が共通と判定できる程度の距離にあるとの分析結果を得た。文明本の本文はやはり日大本にも少なからざる影響を与え続けていたということだろう。但し紅梅本と本文が異なるものもある。この変容した部分こそ三條西家本の推移を考える好材料となるが、今回の研究ではそこまで踏み込むことは出来なかった。

(3)室町時代の代表的な青表紙本系写本における紅梅本の位相について、表記法から見た分析結果は、紅梅本が最も親しいのは日大本だったが、次に親しかったのは池田本と保坂本であり、大島本とは松風巻のみ異同が少なかった。大島本と親しいのは、大正本と書陵部本で、それぞれ7巻ずつ本文異同の少ない巻があった。

(4)紅梅本と同じ奥書を有する写本として、熊本大学図書館本(以下、熊大本と略)の存在も明らかになった。紅梅本と熊大本には、少なくとも一部には同一書写者が関与しており、かつ紅梅本の横笛巻の仮名字母の使い方が実隆のそれと酷似していたこと、一方熊大本の横笛巻にそうした傾向は見られなかったことなども判明した。同じ上臈局本を同一書写者が書写していることから、紅梅本も熊大本も、ほど遠からぬ時期に作成された上臈局本の複本だったのだろうと思われた。なお伏見宮家の上臈局本は、同宮家の発足後、初めて作成された源氏物語の写本であり、書写を担当した上臈局(今出川教季女)は、陽明文庫蔵後柏原院本源氏物語の筆者札にも名を連ねていた。おそらく書写の得意な女性だったようである。

(5)熊大本を再発見できたことによる最大の功績は、紅梅本と熊大本に共通する鈎点や書き入れ(異文注記・注釈、時に本文訂正など)が確認できた点にある。かかる共通書き入れは文明本由来のものと認定できるからである。紅梅本には書き入れの多い巻もあったのだが、熊大本と一致しなければ、それらは後代の書き入れであって文明本由来のものではないと判断できよう。そのため報告書には紅梅本の全ての書き入れ箇所について、熊大本と比較した結果を一覧表にまとめて添付しておいた。

最後に、室町時代の源氏写本作りは、巻毎に様々な底本を取り合わせ、それらを巻単位で複数の人々が書写していくところの、所謂取混ぜ本を寄せ書きで書写する方法が一般的であった。有名な堂上歌人であり、古典学の権威でもあり、更に名筆家でもあった実隆もまた、都鄙貴賤様々な人々の依頼を受けて、源氏写本の書写・校合(指定された写本を写したり、他筆者が清書したものを底本と照合したりという場合もあった)奥書の起草や題簽の揮毫などを数多く引き受け、時には自らの手沢本さえ売却してしまっていた。今日、室町時代の少なからざる写本が、三條西家本と銘打っていたり、実隆の関与が指摘されているのはそのためである。

だが同じく三條西家本とはいうものの、その実態は一様ではなく、具体的に実隆がどこまで介

入っていたかは個々の写本を精査してゆくしかない(例えば前述した書陵部本などは、実隆自身のテキストなどではなく、実隆協力本と位置づけるべきである)。そのためには、最も核となる実隆手沢本の本文がどうなっていったのか、少なくとも紅梅本と日大本をもって、三條西家本の骨格をなす手沢本の流れを明確にしておく必要がある。日大本の画像は同大学によって既に刊行されているが、紅梅本は未公開であった。以上が、科研費の補助を受けて紅梅本の全画像をインターネットで公開した理由である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 上野英子	4. 巻 41
2. 論文標題 伏見宮家の源氏物語享受－貞成親王・邦高親王を中心に－	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 実践女子大学文芸資料研究所「年報」	6. 最初と最後の頁 47 - 76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34388/1157.00002291	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 上野英子	4. 巻 40
2. 論文標題 紅梅文庫旧蔵本源氏物語「若紫」巻解説・影印 付、新出定家四半本「若紫」と三条西家本との位相に関する考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 実践女子大学文芸資料研究所「年報」	6. 最初と最後の頁 11 - 180
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34388/1157.00002235	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 上野英子	4. 巻 39
2. 論文標題 いま、なぜ、三条西家本なのか 付紅梅文庫旧蔵本源氏物語「空蝉」影印	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 実践女子大学文芸資料研究所「年報」	6. 最初と最後の頁 19-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34388/1157.00002115	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 上野英子	4. 巻 -
2. 論文標題 明融本源氏物語を通して覗く室町期寄合書きの一実態	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 源氏物語 本文研究の可能性	6. 最初と最後の頁 131-156
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 上野英子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 武蔵野書院	5. 総ページ数 442
3. 書名 源氏物語三条西家本の世界 室町時代享受史の一様相	

〔産業財産権〕

〔その他〕

紅梅文庫旧蔵本源氏物語 https://genji-koubai.jp このWebは、紅梅文庫旧蔵本全頁のカラー写真を『源氏物語大成』頁数から検索できるよう処理して公開したもので、併せて今回の科研費で作成した報告書のPDFも掲載したものです。

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------